

吉田印刷株式会社

<http://www.yoshida-print.co.jp/>

本社：神奈川県大和市下鶴間2-1-22
☎046-262-2021

東京営業所：東京都中央区日本橋馬喰町1-6-8 第二久ビル6階

創業：1894年(明治27年)

代表取締役社長：吉田 彰宏

ホームページURL



代表取締役社長
吉田 彰宏 氏

化粧品パッケージ製作の 知見を活かし新分野へ

高級感を醸し出す根幹となる印刷工程をRMGT 10で強化

高級パッケージ印刷への強さを旗印に掲げる吉田印刷株式会社。パッケージ製作において、華やかな加飾やデザインを施すことも重要な要素ではあるが、製品の基礎・土台となる印刷工程において確かな品質を実現することがもっとも肝要となる。そこで昨年11月から、その基本能力の強化を図るべく菊全判6色コーター付UV印刷機「RMGT 1020LX-6+C+LD(UV)+PQS-D(I+C+R)」(以下、RMGT 10)を導入して本稼働を開始させた。

同

社は1894年に事業を開始し、今年で創業127年となる長い歴史を紡いできた老舗印刷会社。創業当初は石版印刷での美術品分野を得意としており、現在の得意分野であるパッケージ印刷については昭和初期頃から手掛けるようになったという。同社の特徴・強みのひとつは、印刷のみならず箔押し、エンボス、打ち抜き、折り、断裁、貼り、製函、スクリーン印刷といったあらゆる加工機を揃え、社内で一貫生産できる点だ。社内で一貫生産できるということは、顧客提案や顧客からの対応要請にもトータルソリューションをもって臨

むことができる。ここが同社の最大のストロングポイントとなっている。

印刷機自体の高い基本性能に加え

RMGTスタッフの親身な対応も評価

このような営業展開をしている同社のオフセット印刷部門では、海外メーカー製の菊全判4色UV印刷機と菊半裁7色コーター付UV印刷機の2台が稼働していた。「これまで使ってきた印刷機の稼働年数や直近の状況をみたとき、メンテナンスや機械停止頻度に増加

傾向がみられた。顧客に対して良いサービス・レスポンスをする上では、当然ながら生産現場がもの作り体制に信頼をおけることが必要なので、長期にわたって安定して使える頑健さやアフターサービスの充実といった点も踏まえ、設備構成を改善することにした。当社ではその顧客・ブランドの顔となり、販売期間が長期に及ぶ製品のパッケージも数多く生産するので、確かな高品質の印刷を末永く実現し続けられそうかどうかは最重要ポイントとなった」と同社の吉田幹取締役は当時を振り返る。

そのような方針をもって、同社においてもっとも厳しく難しい条件となる実際のジョブ内容をもってさまざまな印刷機のテスト・検証を実施。その結果、同社では初となるRMGT製印刷機を、既存機との入れ替えで導入した。

実際に稼働をすると、印刷機の基本性能そのものとなるベタ刷りの仕上がりが具合やゴーストが出ないことがこれまでと顕著に違った。ま



社内一貫生産を支える設備

取締役
吉田 幹氏



製造事業部長
唐澤 徳行氏



ロット制作への対応などの細やかな対応力やサービス提供を売りにした営業展開をしている。また、化粧品パッケージを長く手掛けたことで培ってきた、差別化が図れるような高級パッケージ製作の知見やノウハウを求め、日用品・薬品・食品といった新たな分野からの新規案件も生まれている」と同社の吉田彰宏社長は最近の受注傾向を語る。

このような新規案件にも対応する機動力強化という点で大きな貢献をしているのが、RMGT 10に搭載された自動化機能だ。「全自動全色同時刷版交換装置サイマルチェンジャーや自動ブランケット洗浄、そしてPQS-Dによる自動見当合わせ、色合わせ作業の迅速化もあり、ジョブ替え時間は1/3程に短縮されている。これにより1日にこなせるジョブ数も増え、さらには損紙も減少するのでとても助かっている。また、印刷物の色を数値で表せるので立ち合い印刷時の説得力も増し、立ち合い時間の短縮にも繋がっている」(唐澤製造事業部長)

た、同社では0.4~0.5mmの厚紙へのパッケージ印刷のほかに、0.06mmという薄紙への能書印刷もしているが、紙厚変更時の爪台調整も容易で、かつ薄紙印刷時のフィーダーからの紙出しもスムーズになった。

同社の唐澤徳行製造事業部長は「印刷機自体の実力も素晴らしいが、機械設置から操作指導、適切な資材選定の助言、カラーマネジメント環境の構築などについてRMGTのサービススタッフが親身に対応してくれて、ここまでやってもらえることに驚いた」と、印刷機のハード面だけでなくソフトや運用面も高く評価している。

多彩な加工設備をフルに活かして

トータルソリューションを提案

安定した高品質印刷を、機動力をもって提供する体制は整った。そこで同社では、化粧品を中心とした高級パッケージ製造という軸はそのままだに、その周辺業界・分野へのアプローチを展開していく構えだ。吉田取締役は「このRMGT 10は、当社がこれからも高級パッケージ製作をしていくための必須アイテムのひとつとなる。しかし、顧客提案はひとつの機械の性能に依存するものでもない。高級パッケージに関する提案をするにあたって、あらゆる加工技術を社内で一貫生産できるという当社の特徴を活かし、高品質印刷という高水準な土台の上に多彩な工程をフルに組み合わせた引き出しの多さ、この強みを前面に出していきたい」と次なる展望を語る。

また吉田社長は「この印刷機を設置・導入する際のRMGTのサービススタッフの親身な対応・コミュニケーションに、我々はとても魅かれた。このような細やかさは、当社がすべき営業姿勢・顧客対応に相通じるものがあると思う。そして、今ある仕事をきちんと重ね、さらに新しい仕事へ進むにあたり、このRMGT 10の導入によって印刷という根幹部分の強さを獲得できた。これをベースに、顧客に満足してもらえる製品・サービスの提供をさらに進めていく」と今後の方針を表した。

小ロット化が進むパッケージ市場

自動化が機動力向上に大きく貢献

パッケージ印刷分野でも多品種・小ロット化は進んでおり、同社でもそうした小ロット受注は珍しくない。「当社規模の会社が大規模な印刷会社と価格競争をしても、生き残っていくことは難しいだろう。だからこそ、急な追加発注、気軽な本機校正や立ち合い印刷、小



ホワイトボードで管理されているメンテナンス表



RMGT 1020LX-6+C+LD(UV)+PQS-D(I+C+R)

